

京都外国語大学 ラテンアメリカ研究所 紀要

2019

<論文>

- ヤシュチランの鳥ジャガー大王の政敵
..... 金子 明 1
- メキシコにおける「慣習」による先住民行政区選挙
..... 小林 致 広 25

<研究ノート>

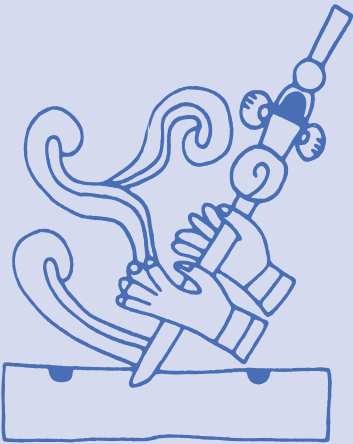
- 戦前日本におけるラテンアメリカ研究 (I)
—江戸期・明治期・大正期における先行研究を中心にして—
..... 辻 豊 治 49

<書評>

- 井村俊義著『チカーノとは何か—境界線の詩学』
..... 牛 島 万 65

<史料紹介>

- フランシスコ・ハビエル・アレグレ著『ヌエバ・エスパーニャのイエズス会管区史』
..... 桜 井 三 枝 子 69



〈研究ノート〉

戦前日本におけるラテンアメリカ研究（Ⅰ）

——江戸期・明治期・大正期における先行研究を中心にして——

辻 豊 治*

キーワード

戦前日本、ラテンアメリカ研究、移民、富源（資源）、モンロー主義

Resumen

¿Cómo se reconoció e investigó América Latina en Japón antes de la Segunda Guerra Mundial? Con el objetivo de contestar a esta pregunta, estudiamos el período Edo, los períodos Meiji y Taisho, y el período Showa, y aclaramos qué tipo de literatura se publicó y sobre qué temática. Desde 1899 (año 32 de Meiji), la inmigración japonesa a América Latina llegó a su pleno apogeo, y el interés por este diferente mundo (América Latina) se extendió a la historia, la política y la sociedad de los países a los que emigraron. Además, no sólo los recursos naturales, sino también el mercado y el destino de la inversión llamaron la atención principalmente en los llamados países ABC: Argentina, Brasil y Chile. Durante el período Showa, los estudios latinoamericanos se desarrollaron dramáticamente, tanto cualitativa como cuantitativamente. Este artículo trata de las características de los estudios latinoamericanos hasta el período Taisho, y nos referiremos a los estudios latinoamericanos en Japón durante el período Showa en el próximo número.

はじめに

戦前の日本ではラテンアメリカはいかに認識され、語られていたのだろうか。資料は戦前の文献となるが、思いのほか残存しており、図書館¹⁾、古書店・古書市、ネットを通じて翻訳書を含め110点余りの資料を閲覧、入手し、重要な文献はほぼ網羅できたのではないかと思う。なお資料として外務省文書や雑誌論文、調査報告書なども参照する必要があるが、本稿では書籍の形で発行された文献だけを対象とした。日本におけるラテンアメリカ認識の広がりを考えるうえで一般図書に限定しても大きな支障はないとの考えからである。

本研究でのもう1つのテーマとして、戦前のラテンアメリカ研究²⁾（理解）が戦後どのような形で継承されたかについても言及していきたい。戦前日本のラテンアメリカ文献についての系統的な研究はほとんどなされていないようである。わずかにラテン・アメリカ協会の文献案内（ラテン・アメリカ協会 1965）と中川清「日本・ラテンアメリカ交流史ⅠⅡ」（中川 1995b, 1996）の文献紹介が目立った業績である。このような未知の領域についてどのような方法で手をつけていくべきかであるが、まず文献を出版年順に整理すると昭和期以降本格的なラテンアメリカ研究が

* 京都外国語大学名誉教授

開始されたことが分かる。つまり従来の事情紹介や移民研究から歴史記述や経済分析、ラテンアメリカ・米国関係に対象分野が広がり、本稿の文献リストを見るかぎり明治・大正期と比べ昭和期の出版数は2倍を超える分量となっている。本稿では江戸期、明治期、大正期についてはとりあえず先行研究期として、昭和期を発展期として位置づけたい。それぞれの時期における代表的な文献を紹介することにより各時期の特徴を明らかにしていく。

1 戦前日本におけるラテンアメリカ研究の特徴

本稿の冒頭で示したとおり戦前のラテンアメリカ研究は「移民」「富源（資源）」「モンロー主義」がキーワードとなる。「移民」とは主権をもたない地域への労働力移動であり、主権の及ぶ地域への入植である植民と区別される（田中 1926:119）。移民研究はまず移民の勧め、移民案内、移住地の訪問記、移住地の実情報告とともに移民たちの生活の場である各国の基礎データはもとより経済事情、歴史について情報もたらされる。「富源（資源）」とは一義的には天然資源を指すが、広義には産業発展や経済力を含意する。日本のラテンアメリカへの関心は移住先としてだけでなく貿易相手、投資先へと広がり、顕在的あるいは潜在的な資源を有する「新発展地」としていわゆる ABC 三国³⁾を中心に膨大な経済データ⁴⁾が蓄積された。

一方、「モンロー主義」は米国の一貫した対ラテンアメリカ政策の総称でもある。汎米主義、棍棒政策、ドル外交、善隣政策などすべてモンロー主義の延長として捉えられている。日本が「大東亜共栄圏」を掲げてアジアへの侵略を図り、米国との対立が日程に上ってくると、米国の「生命線」として戦略上のラテンアメリカが焦眉のテーマとなってくる。モンロー主義は本来、ラテンアメリカの独立確保を米国が保証するというものであったが、その後テキサスの分離独立から米墨戦争と領土の剥奪、米西戦争とキューバ保護国化、メキシコ革命への介入、パナマ運河建設と運河地帯の領有、中米・カリブ地域支配、対枢軸国参戦への働きかけなど「モンロー主義」の名のもとにその拡大解釈を加えながら、対ラテンアメリカ関係を規定していった。このような米国による覇権は「帝国主義」として一括されている。この視点は歴史を遡ってスペイン・ポルトガルの植民地支配、英国の半植民地支配に及び、帝国主義論や世界システム論につながる視点がラテンアメリカ研究のなかで獲得されていた。

またラテンアメリカを特徴づける歴史概念や用語、地理概念や地名、人名について戦前からの検討や試行錯誤のなかから現在の概念や表記が確立されたと考えられる。まずこの地域の名称であるが、ほぼ中南米とラテンアメリカに二分される。この2つの用法について野田良治は次のように指摘をしている。

中央アメリカおよび南アメリカを短縮したものが「中南米」の一語であることは…明白であるが、この稱呼は単に或る地域の名稱たるに止まり、ラテン・アメリカなる稱呼が持てる如き、文化的・歴史的意義を全然持っていない…適稱ラテン・アメリカを使用する者、最近著しく増加し來れるに鑑み、ラテン・アメリカに統一することは…吾人の切望して已まざる所である。（野田 1943:9-11）

さらにラテンアメリカ表記は羅典亜米利加、羅甸亜米利加、拉丁亜米利加、ラテン・アメリカと変遷し、中黒のない表記「ラテンアメリカ」を統一的に使用しているのは、戦前では主にラテンアメリカ中央會⁵⁾ 関連の出版物においてである（ポブレテ・トゥロンコンソ 1942; 織田 1943; 海

本 1943; ラテンアメリカ中央會編 1944)。なお、国名については漢字表記からカタカナ表記に変わり、地名、人名表記については文献によって千差万別であるが、いずれも英語発音を採用する表記⁶⁾が一般的であった。この点でも野田良治は「原則として國號・地名・人名は、その本國または本人の稱へ方に従ふべきが至當であろう」(野田 1943:7)と指摘し、各国別に正称と俗称の一覧表を掲載している。メヒコ・メキシコ、オンドゥーラス・ホンデユラス、ヴェネスエラ・ベネズエラ・ベネゼラなど(野田 1943:5-6)。

本稿では先行研究期のラテンアメリカ研究について見ていく。

2 先行研究期—江戸・明治・大正期のラテンアメリカ研究—

2-1 江戸期

江戸期にイタリア人、ポルトガル人、オランダ人をつうじて間接的にラテンアメリカと接し、彼らからの聞き取り調査と当時のわずかな情報を融合してその地理的位置や地名が断片的に紹介された。ラテンアメリカを紹介した文献は以下のとおりである(中川 1995b:134-138)。

- 1708年 西川如見『増補華夷通商考』(後述)。
- 1713年 新井白石『采覧異言』(後述)。
- 1715年 新井白石『西洋紀聞』(後述)。
- 1777年 前野良沢『管蠡秘言』「閣龍(コロンブス)」が創設した植民地としてイスパニョラ島、キューバ、ジャマイカ、サントドミンゴ島を紹介。
- 1805年 司馬江漢『和蘭通舶』「閣龍」が西廻りで至った大陸は、南北の広大な土地で、共に「亜墨利加洲(アメリカ)」と云う(司馬 1976:502)。
- 1845年 箕作省吾『坤輿図識』キューバなど西印度諸島を紹介、キューバについて首都は「ハハナ」と云い、スペイン総督府がある。
- 1851年 善助『東航紀聞』漂流者の聞き書き。栄寿丸が犬吠埼沖合で台風に遭遇して漂流し、4ヵ月後スペイン船に救助される。その後、カリフォルニア半島に上陸し、1ヵ月滞在した。メキシコ事情やスペイン語に言及している。
- 1854年 靄湖漁叟(撰)『海外異聞』善助らの漂流者一行の一人初太郎、メキシコでの見聞を絵で示す。コーヒーヤパン、ココアなど食文化について記述、とくにコーヒーについて詳細に説明している。

なお、コロンブスを日本で最初に紹介したのは、1777年に著された前野良沢の『管蠡秘言』である。イタリア人の「閣龍」が三大陸の他に大陸があると考えて(スペイン)王に進言して西廻りの航海に出、新世界に到る。彼は諸国にキリスト教を広める僧であろう。その後、「亜墨利求思(アメリゴ・ベスプッチ)」なる者、西南を航海して大陸に至り、それに因んで「亜墨利加」と名付ける(前野 1976:145-146)。また播州(濱田)彦蔵が『漂流記』(1863年)においてコロンブスに言及している。今からおよそ378年前、「ヂノワ」という所に「コロンヒス」という人物がおり、航海を好んで日本に辿り着こうと思い立ち、西廻り航路をスペイン王に提案し、三艘の船である大陸に到達した。しかしそこは日本ではなく、「アメリカ」であった。何の因縁か「アメリカ」人が今度は日本にやって来て開港させたのは、「コロンヒス」の志が実現したということである(荒川編 1962:227-228)。

西川如見『増補華夷通商考』（1708年）

著者は長崎の商家に生まれる。天文暦学、地理学に通じ、長崎での見聞にもとづいて1695年日本で初めての世界地誌『華夷通商考』を刊行した。しかしこの書には米州は含まれず、米州が記されているのは、1708年に刊行された『増補華夷通商考』である。巻五の「外夷増附録」にヨーロッパの他、アフリカ、「亜墨利加（アメリカ）」、オセアニアの地誌を充てている。

「亜墨利加」は南北に分かれている。北米については「キビラ」「タゼエル」「ノウハフランス（カナダ）」などの地名が出てくる。ラテンアメリカについて、「ペルー（ペルー）」は熱帯の大国で金銀を産出する。雨は降らず、地中から湧き出す。油膏や樹脂を使ってミイラを作る。地震国で大きな家は作らないが、国王の宮殿は金銀が鏤められ、華美である。文字はなく縄を結んで記録し、鉄の使用なく木と石で武器を作る。「ハラジイル（ブラジル）」は大国で北部は熱帯、南部は四季がある。男性は裸で、草の根（マンジオカ）を粉にして餅をつくる。食人（掲載図で「食人国」と記している）の風習あり。砂糖生産を行う。南に「銀河（ラプラタ川）」あり、平地に溢れた水が退くと銀砂が残る。世界一の大河である。「チカ（チリ）」は「長人国」とも云い、「パタウン（パタゴニア）」はその属領である。その住民は身の丈一丈（3メートル）もある。好んで弓を射、顔に彩色を施す。南極に近い寒冷地である。「キンカスラ（コロンビア）」は世界一の金銀の産出国。それ故、諸方との交易盛んで物価も高い。「モシコ（メキシコ）」は温暖の地で畜産業が盛ん。七面鳥を食す。昔は魔神を祭り、食人した。「イスハニヨル（イスパニョラ島）」、「クウバ（キューバ）」、「ガマガ（ジャマイカ）」などこの海域は熱帯で黄金が採れる島や勇猛な女性が弓を射る島など多数の小島がある。「ハルモタ（パーミューダ）」は無人島で魔物が出る。航行する船を驚かし、「鬼島」とも呼ばれている。

本書が日本における最初のラテンアメリカ文献ということになる。

新井白石『采覧異言』（1713年）、『西洋紀聞』（1715年）

イタリアの宣教師シドッチが1708年8月、日本での布教のため薩摩屋久島に上陸したが捕らえられ、1709年11～12月江戸において新井白石が四回にわたり訊問、この聞き書きとオランダ人から得た情報にもとづいて『采覧異言』と『西洋紀聞』を著した。『采覧異言』に出てくるラテンアメリカの地名は、ブラジル、チリ、ペルー、コロンビア、ニカラグア、ホンジュラス、グアテマラ、メキシコ、キューバ、ジャマイカ、イスパニョラ島、パタゴニア、ユカタンなどであるが、簡単な地理的説明に止まっている。例えば「古巴島（キューバ）」は「花地（フロリダ）」の南の島であり、「牙里加（ジャマイカ）」はその南にある小島である。

『西洋紀聞』では、「ノラルト・アメリカ（北米）」の南に「ノーワ・イスパニヤ（メキシコ）」があり、さらに南下すると「ソイデ・アメリカ（南米）」となる。メキシコの港に「アカプールコ」があり廻船が多く集まる。1608年（正しくは1609年）メキシコの船（フィリピン臨時総督ビペロ一行）が上総沖で難破、我国で修理して帰還させる。答礼使節ビスカイーノが来朝し、同年に我国のローマ行商船がメキシコに赴くが現在では国交は途絶えている。「パラシリヤ（ブラジル）」は南米東方の地で荒野が広がり、森林や洞窟に住み、食人の風習がある。また『万国坤輿図』（マテオ・リッチ作成の世界地図『坤輿万国全図』のこと）によると、「パタゴラス（パタゴニア）」はオランダ人がこの地の海岸で2人分の長さの足跡を見つけたため、この地を「長人国」と推測した。また「孛露・ペールイヒヤノム（ペルー）」でバルサム（樹脂、松脂などの香料）が産出する。

2-2 明治期

福澤諭吉『世界國盡 (巻四 北亜米利加洲、巻五 南亜米利加洲、大洋洲)』(1869年)

福澤諭吉が江戸期のラテンアメリカ知識を大幅に前進させた。本書は世界への知識が文明発展の基本となるという考えから児童向けの啓蒙書として書かれている。

「亜米利加」は「北亜米利加州」と「南亜米利加州」に分かれている。「北亜米利加」の「女喜志古 (メキシコ)」について地理・人口・産物を紹介し、金銀など資源は豊かであるが、政変は止まず国民の教育も進まず。1821年に独立、1864年フランスに征服され、「まきしみりやん」が皇帝となったが、2年 (正しくは3年) で処刑された。メキシコの南の「中亜米利加」は数カ国が「割拠自立」し、対立状況にある。その東に広がる島々は「西印度」で、「古論武子」が最初に発見したのが「猿和土留 (サンサルバドル島)」であるが、「亜米利加」や「太平海 (太平洋)」があるなど夢にも思わず、インドの端と考えたためこの名が残っている。「拝地」、「邪麻伊嘉」、「久場」、「馬浜」は世に知られている。砂糖、「骨非 (コーヒー)」、綿、煙草が特産品でとくに「久場」の「葉羽奈 (ハバナ葉巻)」は世界に類例を見ない。「南亜米利加」は「巴奈馬 (パナマ)」地峡を挟んで「太平海」と「阿多羅海 (大西洋)」のあいだに広がる大陸で、北から「古論備屋」、「部根重良」、「五井梁 (ギアナ地方)」、「赤道国 (エクアドル)」、「平柳」、「保里備屋」、「池鯉 (チリ)」、「巴羅貝」、「良富羅多 (アルゼンチン)」、「宇柳貝」、「武良尻」が位置している。ブラジルは一大帝国であり、次第に文明・教育が普及しているが、内地は未だ「珍禽異獸夥し」。またチリは日本と季節が逆であり、文明・教育とも進んでいる。その北のペルーは農鉱業、海鳥の糞が産物であり、またキニーネでも有名である。1824年に「いやくちよ (アヤクチョ)」の戦いで共和国として独立した。

地理と産業を中心として独立後のラテンアメリカの全体像を初めて明らかにした。

根本正『南米伯刺西爾、中米尼加拉瓦、瓦地馬拉、西印度ゴアデロブ探検報告』(1895年)

榎本武揚が1893年に設立した殖民協會の幹事でもあった著者は外務省通商局の職員として、1894年10月から234日間にわたりブラジル、ニカラグア、グアテマラ、グアドループ島への現地調査に赴いた。移民の歴史、ヨーロッパからの移民の受け入れ体制、日本からの移民の可能性、またニカラグアでは運河の調査を行った。ブラジルではヨーロッパからの移民に対し、船中の疲労を癒し、就業先のコーヒー農園を選ぶため接待館が設けられ、食事も朝食・夕食 (コーヒー、パン、バター)、昼食 (スープ、豆、米飯、芋、肉、野菜、パン、蜜柑かサツマイモ) と用意され、手厚いもてなしぶりを伝えている。ブラジルの概観を紹介しながら、欧州移民に対する待遇や条件を示すサンパウロ州の労働規則や移民会社との契約書など詳細に調査している。ニカラグアでは一般情勢ととくに一章を設けてニカラグア運河の進捗状況を報告している。1825年中米連合が米国に運河建設の可能性を打診したことが発端であり、79年の運河ルート計画では大西洋岸グレートンを起点にサンファン川からニカラグア湖を経て太平洋岸ブリトー港に至るもので、工地上、経済上、商業上もとても有利である。パナマ運河の工事は挫折し、メキシコのテワンテペク地峡鉄道は開通したが、運河としてはニカラグア運河が唯一の水路となろう、と結論づけている。グアテマラについても一般事情や耕作地での地主・労働者の法的関係を定めた労働法などが紹介されている。1493年コロンブスによって発見されたグアドループ島について、1835年にスペイン領から仏領に移行したこと、グアドループ本島、グランド・テール島および付属地についてそれぞれの地形やサトウキビ、コーヒー、綿花などの産業が紹介されている。さらに台風 (ハリケー

ン)の綿密な調査がなされている。

秋山四郎『外國地誌』(1897年)

世界各国の地勢、気候、産物、人種などが簡単に説明され、要所で歴史やエピソードが紹介されている。「ニカラガ」では目下運河工事中で、これが竣功すれば世界貿易に大きな影響をもたらす。「ピザロー」は「秘露」が金銀に富めることを聞き、手勢を率いてこれを奪い、全土をスペイン領とした。「智利」の国民は活発にして知力に富み、国運日進の勢いあり。「巴西(ブラジル)」は南米第一の大国で先年、国民相謀り国体を共和国として、帝をポルトガルに追放した。

野々村戒三『南北アメリカ史』(1903年)

早稲田大学の講義録である。本格的な南北アメリカ通史として明治期の傑出した業績である。全55章のうち15章がラテンアメリカ、6章が共通の章である。コロンブス以前のアイスランドやグリーンランドなどへの大西洋探検史、アステカ帝国とインカ帝国の成立史について当時の学説を紹介している。前者は北方から南下して中部メキシコに定住化する。後者についてはティティカカ湖の大地創成伝説その他、起源について3つの学説を紹介している。スペイン植民地政策は盲目的我欲的で苛酷な労働を強いて、18世紀に至りペルーの反乱(トゥパク・アマルの反乱)が起こるが本国政府はこれを鎮圧し、なお30年間は植民地平和が維持された。1810年に独立の動きが始まる。ラテンアメリカ全体の独立に至る一連の歴史過程が描かれている。特筆すべきはサン・マルティンがペルーを攻めきれず「終にグアヤキルにポリワアルを訪ひ、その助力を仰がんとせり」(1903:302)と、1822年のグアヤキル会談に言及している。

ナポレオン没落後、1815年神聖同盟が結成されたが、それは自由主義鎮圧同盟であり、スペインによるラテンアメリカの奪回を支援するなど共同でラテンアメリカ支配を画策した。これに対し米国(本書では北アメリカや合衆国と記述)はラテンアメリカが列強の草刈り場となるのを危惧し、モンロー主義を標榜した。コルテスの時代から大西洋と太平洋を結ぶ運河計画があり、米国はカリフォルニアを得て以来その実現が切実となり、当初ニカラガアでのサンファン港からブリトー港を結ぶ運河計画が進んだ。しかし次第にパナマルートが有力視され、コロンビア政府は1878年仏万国運河協会に開鑿権を授与したが、1889年このレセップスの会社が破産し、4千万ドルで米国に譲渡された。最終的には運河利権をコロンビア政府が拒否したため、米国はパナマ独立に手を貸し、「合衆国のモルガンはパナマ全国を千萬弗にて買上げ、合衆国に併合し」(1903:531)た。さらにメキシコ、南米各国およびカリブ海地域の19世紀の政治史が語られている。

箕作元八、峰岸米造『西洋史綱』(1903年)でのラテンアメリカ関連の記述は、コロンブスのアメリカ大陸発見、ラテンアメリカ諸国の独立、テキサスの分離・独立、米墨戦争、ナポレオン3世によるメキシコ侵略、モンロー主義、マクシミリアンの銃殺、キューバ独立、パナマ運河開通である。井原儀『世界近世史』(1904年)ではコロンブスの新大陸発見、ナポレオンのポルトガル侵略とブラジル帝国の建国、中米連合の成立、南米の独立、メキシコ19世紀史(独立からディアス政権成立まで)、太平洋戦争、米西戦争、ニカラガア運河の挫折、パナマ独立と運河建設が取り上げられている。

松尾小三郎『南米航海日記』(1906年)は1903年第2回ペルー移民船(英船「デューク・オブ・ファイフ」号)に便乗して日本とペルーを往復した117日間の航海記録であるが、ペルー征服史を紹介し、またトゥパク・アマルに多大な関心を示している(3-②参照)。

明治期は榎本殖民に始まり、ペルー、ブラジルへとラテンアメリカへの移民熱が高まり、移民

の勧め、手引書、現地事情、移民の現状を報告する移民文献（水野 1906; 横山 1908; 松川 1911）が現れた。松川二郎『南米と南洋』（1911年）は日本人移住地の実情報告で、南米は世界の宝庫としてとくに資本家として起つことを勧めている。一方で移民会社や仲介人の口車に乗せられないよう警告している。こうしてラテンアメリカへの認識や研究が時代の要請となり、大正期に引き継がれていった。

2-3 大正期

大正期は移民研究が本格化し、ブラジル関連の文献が多数出版された（横山 1913; 居初 1915; 田中 1919; 竹澤 1924; 藤田 1924; 山崎 1925）。横山源之助『南米ブラジル案内』（1913年）はすでにブラジルでの日本人移民は1万人を超えているが、今後数万数十万人と増やしていく必要があるとして、ブラジルの一般事情とともに農業とくにコーヒー耕地での労働条件や生活実態を紹介し、サンパウロを中心として移住先としての可能性を示唆している。世界で多くの移住地があるなかでブラジルが日本人にとって有望なのは、産業が発展し賃金が高いこと、移民を積極的に受け入れていること、気候条件が良好であること、人種的偏見がないことを挙げている。

ペルーおよびABC三国は移民にとり南米の「新発展地」と呼称された。岩崎實太郎『南米へ—最近の智利事情—』（1924年）はチリの発展地としての将来性に注目して、政府関係者や民間研究者との交流にもとづく経済分析と関係当局や新聞から膨大な経済統計を収集した554頁の力作である。著者は農商務省から5年間海外に派遣され、うち過半をチリで過ごしたとある。また「南米の理想郷」としてパラグアイへの移民を勧める文献（田中 1926）も現れている。クレマンソー『今日の南亜米利加』（1913年）はフランス前首相によるウルグアイ、アルゼンチン、ブラジルへの視察記である。単なる旅行記に止まらず政治、社会論あるいは文化評論となっている。序文でブラジルの上院議員の言葉「1492年10月12日金曜日の大事績は、亜米利加人がジェノアの偉人を以って欧羅巴を発見したる事」（1913:1）を引用して、相対的な視点でラテンアメリカから学ぶことを表明している。

井原儀『墨西哥事情全』（1914年）

第1編総論（地理、気候、産業、住民、教育、政治）、第2編地方誌、第3編歴史と日墨関係となっている。1609年フィリピン臨時総督ビベロー一行がアカプルコに向かう途次、現在の千葉県御宿の田尻浜に漂着したことが日墨の関係の契機となり、1613年の支倉使節団がローマへの往きと帰りにメキシコを経由したほどであるが、鎖国により1888年の条約締結までメキシコとの関係は断絶した。メキシコ史については独立、テキサス事件、米墨戦争、仏国の来寇、共和政府の復興と進み、ディアス時代の30年間にメキシコは未曾有の発展を遂げたとしてその功績を高く評価し、その後のメキシコ革命については、米国と通じた革命党によるものとしている。

大日本文明協會編『墨西哥全』（1914年）

メキシコ入門書である。全体の四分の一ずつが風土と歴史に充てられ、残りが風俗、教育、宗教、軍事、資源・産業となっている。歴史篇では1835年のテキサス問題からアラモ虐殺事件が起こり、これが米墨戦争を引き起こすこととなった。アラモで140人（実際は180名余）の米国人を虐殺した責任はサンタ・アナにある。ディアスはその征討軍に加わり、さらにフランス軍をメキシコから追放するのに貢献した。ディアス政権の殖産興業政策を含めて、戦前の日本ではディアスへの評価はきわめて高い。本書でも「世界に於いて最も偉大なる政治家の列伝中に入るべき

人なり」(194頁)とある。歴史篇は1913年のマデロの暗殺で終わっている。

伊達源一郎編『南米』(1915年)

20世紀には東亜と南米が競争の舞台となる。ABC三国始め南米の発展は外国資本と外国人移民の力によるが、日本は貿易も移民も微々たるもので、これはラテンアメリカに関する知識のなさによるとし、本書はとくに経済地理、資源、産業など経済的側面と対米対日関係に焦点を当て、日本人の南米発展に資することをめざす、とする。

ラテンアメリカでは寡頭政府の圧政に敗者の不平を表現する方法がない。したがって大統領を転覆して自ら解放者を名乗り、政権交代が実現する。しかしその大統領も専制君主と変わらない。南米諸国の経費は鉄道・道路などの生産設備ではなく無用の官吏を増やす。米国に対し「拉丁亜米利加人の脳中には、常に北米の帝国主義なる悪夢あり」(1915:78)、パナマ運河地帯の獲得やメキシコ(革命)への介入など今や解放者ではなく、征服者である。米国はアメリカという語を専有し、自らアメリカ人と呼んでいる。米州連帯を唱える全米主義はモンロー主義の別動隊となっている。

アルゼンチンは広大なパンパを中心に農牧業とそれを支える鉄道網の発展により将来世界の一大強国となりうる。ブラジルは北部の砂糖、サンパウロ州のコーヒー、内陸部の牧畜、アマゾンのゴム、その他綿花、マテ茶、堅材などを産出している。この両国は移民就業の機会に恵まれている。チリ、ペルーなどの太平洋岸諸国もパナマ運河の開通により米国も注目する新たな発展地であり、ラテンアメリカは未開発の利源が多く、今や世界の注目する列強の競争の場となっている。本書は大正期のもっとも卓越した南米評論である。

深尾幸太郎『植民地大鑑』(1916年)

植民地およびかつて植民地を経験した国と地域に関する基本データ、歴史、経済情報、日本との関係について関係各省、在外公館から情報収集したもので、パナマを含む南米とメキシコその他、米国、カナダ、オーストラリア、フィリピン、ボルネオ、中国、朝鮮など35の国、地域が対象とされ、総頁数2345頁の大部の文献である。視点や項目、分量に違いがあり、統一的な構成にはなっていない。メキシコの項では、ディアス大統領の功績を称えながらも人権、自由の時代に対応できず失脚し、その後の革命の経緯を詳述している。マデロ大統領暗殺時、その家族が他でもない在墨日本公使館に避難したのは、メキシコ人の日本人への信頼と親情の証しだとしている。パナマの項では、20頁のうち13頁がパナマ運河に費やされている。パナマ運河は米国にとり国内の東西間を密接化し、産業の振興、西部の開発につながる。対外的には米国帝国主義の一武器となる。これを利用して太平洋上の覇権を握ろうとしていると、米国にとってのパナマ運河の重要性を指摘している。

このように1914年のパナマ運河の開通は日本とラテンアメリカ、とくに大西洋岸諸国との経済関係が拡大する一方、米国のラテンアメリカ支配が一層強化されることからパナマおよびパナマ運河への調査研究がこの時期から重要視される(松尾1914;伊達編1914)。

朝日胤一『總南米』(1921年)

南米滞在十数年来の著者が移民のためにパナマを含む南米各地の都市や地方の情報を提供している。南米は国土拡大にして豊穡なるに反し人口寡少であり、産業は未発達で科学研究や専門教育に欠けているので、日本人が能力を発揮できる土地として最適である。終章に当たる「移民心理と植民」「移民の土人化と其改善」で日本人移民の目的は故郷に錦を飾ることであり、国家が植

民政策として永住化を図ることはその目的を阻害し、後続の移民を根絶することとなる。むしろ新陳代謝を図って新たに国民教育を受けた者を移民として送るのが良い。ブラジルとペルーは「土人（先住民と黒人などの意）」⁷⁾が多く、彼らと交わるにより「土人化」が起こるが、これを防止するためには良質な渡航者を育成するしかない。

朝日胤一『ラテン・アメリカ史論』（1922年）

メキシコおよび南米11カ国の各国別通史である。日本人と祖先を同じくする先住民がスペインの侵入により悲惨な末路を辿った。英仏を排してスペインとポルトガルが300年間植民地を支配してきたことは驚嘆に値する。独立は自覚的なものではなく、背後に外国勢力の暗躍がある。またスペインの圧政への不満が革命思想を爆発させた。こうしてスペインが衰退するに至ったのは、時代を超えた国家計画がなかったからである。このことをラテンアメリカの歴史から学ぶべきである。独自の史観と物語風の記述が特徴である。

山岡光太郎⁸⁾『南米と中米の日本人』（1922年）

1912年イスラム圏を中心とした世界巡遊の旅に赴き、欧州を經由して1916年から4年間、日本人や日系社会と触れ合いながらパナマを含む南米11カ国とグアテマラ、メキシコを放浪したときのラテンアメリカ訪問記である。自序で一大冒険旅行と述べているように風土病や盗難、スパイ容疑などを経験し、奔放な性格と合わせて型破りのラテンアメリカ紀行となっている。野口英世と同時期にエクアドルに滞在している（3.⑨参照）。

3 戦前日本におけるラテンアメリカ研究のなかの人物像

先行研究期と昭和期をつうじて移民研究と並行して、ABC三国、メキシコ、ペルー、キューバ、パナマなど主要国の通史はほぼ出揃っていた。通史では必ず言及される征服者、19世紀初頭の独立運動の指導者、歴代政権の大統領や皇帝以外に、ラテンアメリカ史上重要な役割を果たした社会思想家、社会運動家について昭和期まで広げて戦前のラテンアメリカ文献ではどの程度取り上げられてきたかを最後にみていこう。それぞれスペイン植民地支配、国内独裁政治、米国の帝国主義支配への抵抗の象徴的人物であるが、その歴史上の重要性に加えて、欧米列強のラテンアメリカ支配の歴史を明らかにし、とくに米国の犯歴を列挙する意図も垣間見られる。また日本人として唯一、米州でその業績が高い評価を受けた野口英世に対するエクアドルでの評価を拾ってみた。

① ラス・カサス（先住民の保護者）

先住民がスペインの圧政下に置かれているため、征服当初ラス・カサスの提議でアフリカから奴隷が導入された（野々村 1903:290）。歴史家としてサントドミンゴ島発見時の人口を百万と記す（佐藤編 1932:173）。レパルティミエントにみられる先住民分配制度は事実上の奴隷化であり、ラス・カサスを初めとするドミニコ会は保護に乗り出す（田中 1940:601）。また「インディアンの使徒バルトロメ・デ・ラス・カーサス」（田中 1940:639-650）という一章を設けて、『インディアスの破壊についての簡潔な報告』の執筆、インディアス新法制定への貢献などラス・カサスの事績を紹介し、「暗黒な頁の續いてゐる西班牙植民史上に燦然と光彩を放つてゐる」（田中 1940:650）。田中耕太郎はさらに戦後出版された『ラテン・アメリカ史概説』において17頁にわたってラス・カサスに言及している（田中 1949 上巻:143-159）。

ラス・カサスの陳情書がスペイン国王カルロス1世を動かし、1543年のインディアス新法の制定となった(プレスコット 1943 下巻:221-222)。また大川周明⁹⁾はラス・カサスを次のように評している。コロンブス一家と親しくその伝記を書いた先住民保護者として有名なラス・カサス(大川 1942:202)。「スペイン植民初期に於ける土人に對する残虐は…ラス・カサスの『西印度破壊略史』の中に、存分に書遺されて居る」(大川 1942:233)。先住民に関するスペインの法令は近代諸国のなかでももっとも人道的なもので、その制定はラス・カサスに負うところが大きい(大川 1942:339)。

② トウパク・アマル(先住民反乱の指導者)

ペルーの反乱(トウパク・アマルの反乱のこと)を本国政府は鎮圧し、植民地体制は維持された(野々村 1903:293)。同族の悲境を見るに忍びず、暴戾非道なるスペインの圧政に抵抗したる最後の君王家にして、言わば南米の佐倉宗五郎と謂うべし。妻ミカエラとともに残忍に処刑された様子が描かれている(松尾 1906:201-211)。1780年の反乱は南米独立の導火線となったとして、トウパク・アマルの名前は明示していないが、反乱の意義を指摘している(深尾 1916:チリの項1)。スペインの圧政に対しトウパク・アマルが反乱したが、クスコで寸断された。その犠牲的精神は先住民ヤクリオーリョに浸透した(朝日 1922:83-84)。1781年のトウパク・アマル2世のクスコ中央広場での処刑図を1572年のトウパク・アマル1世に対するものとして掲載している(福中 1940:115)。

1780年トウパク・アマルとトウパク・カタリはスペイン統治に反旗を翻したが、機熟さず、惨殺される。トウパク・アマルの反乱はスペイン没落の兆候である(ラテンアメリカ中央會編 1944:137, 734, 737)。独立運動の先駆けはキューバやベネズエラで起こっていたが、本格的にはインカ帝国の復活を企図したトウパク・アマルの反乱はカリブ海地域にも影響を与えた(細木 1944:113)。インカ皇帝の後裔として同族を解放するために六千の軍勢を率いて反乱を起こしたが、翌年捕らえられた。反乱の見せしめとして残酷な処刑とその後の先住民への弾圧が続いた(田中 1949 上巻:209, 252-254)。メキシコのファレスはトウパク・アマルのように先住民の代表かつ解放者として活躍した(田中 1949 下巻:216)。

③ マルティ(キューバ独立の指導者、詩人)

1895年の第二次独立戦争の志士であり、思想家、学者で建国の功労者。1892年マルティを領袖とする国民革命党が結成される(ラテンアメリカ中央會編 1944:426, 434)。マルティは1895年の独立革命の中心的指導者で、「使徒」と呼ばれており、また詩人でもある(田中 1949 上巻:333)。

④ サパタ(メキシコ革命の指導者)

メキシコ革命において農地分配政策を提唱し、真の革命は社会的経済的でなければならない、と主張した。マデロはサパタの農地分配政策を新政府の政綱としたが、実行する勇気がなかった(柳澤健「墨西哥革命を解剖する」「建設期に入った墨国の政治」佐藤編 1932:64, 81)。ウエルタに対し3人の指導者が立ち上がった。カランサの他、北方からはパンチョ・ビリャという悪徒の首領が、3番目にはモロロスの先住民であるサパタが革命的侵略で農民を駆り立てた(ガンサー 1942:46-47)。アヤラ綱領の下に農民運動を指導し、イダルゴ、ファレスとともに民衆の解放者として尊敬されている。1919年非業の死を遂げた(田中 1949 下巻:222-225)。

⑤ ビリャ(メキシコ革命の指導者)

反ウエルタ決起、トレオン市の奪回、カランサとの対立、米国のカランサ政権承認に対して排

米主義を強める。米国はメキシコ国境におけるビリャ討伐軍を編成するなどメキシコ革命に関連してビリャについて8頁に亘って言及しているが、サパタの名前は出てこない(深尾 1916:メキシコの項 8-15)。メキシコを訪れ「チワワ附近に將軍ビヤを偲び…」(永田 1921:3)。1914年カランサと社会的経済的政策で合意した。しかし米国はカランサ政府を承認し、ビリャ軍の排除を図る(柳澤健「墨西哥革命を解剖する」「建設期に入った墨国の政治」佐藤編 1932:67, 84)。ビリャがカランサと対立すると米国は武器輸出を禁止した。米国境周辺でのビリャ軍による米国人殺害に対し、米軍が派遣された(柳澤 1933:194-195)。ウエルタが大統領になると1914年2月、北部トレオン市でビリャも挙兵した(松井 1940:45)。

⑥ アヤ・デ・ラ・トレ (ペルーの政治指導者)

レギア政権への反対運動から頭角を現し、アプラ党を結成して、ペルー政治に大きな影響を与えた(ガンサー 1942:138-140)。彼の政治思想に影響を与えたのは、インカ文明、コルドバ大学改革、メキシコ革命である。米国の善隣政策により反米姿勢を変化させた(ガンサー 1942:148-154)。市民運動の台頭から生まれたアプラ党の代表で、1931年大統領選に敗れる(ラテンアメリカ中央會編 1944:736-37)。大学改革から社会改革に乗り出しアプラ党を創設する。党綱領において反米帝国主義、ラテンアメリカの統一、パナマ運河国際化などを掲げたが、善隣政策に応じて親米に転換した(田中 1949 下巻:147-150)。

⑦ マリアテギ (ペルーの社会思想家)

スペインの植民地支配における労働力確保の手段として導入されたミタ制の調査研究を行った「アメリカ(米州)」人の一人として名前が挙げられている(ポブレテ・トゥロンコン 1942:39)。本稿の対象を離れるが、ラテンアメリカ中央會の月刊誌『ラテンアメリカ研究』(1942年9月号)にマリアテギへの言及がある。人類史の1つの方向として既成階級に無産階級が取って代わるといふ思想潮流の代表がマリアテギである。「宗教の意義を充分認知して…我々の時代の宗教の眞の継承者は、革命的社會主義者であるということを確認していた」。また著者は、アヤ・デ・ラ・トレは宗教的信念と精神主義にもとづく革命を志向したとして、マリアテギとの類似と対比を論じている(ジョン・エー・マッケイ、間宮直香訳「南米生活を繞る二大思潮」75-82)。このマリアテギ論については続編で取り上げたい。

⑧ サンディノ (ニカラグアの反米闘争の指導者)

1927年米国がニカラグア干渉に乗り出すとサンディノは武装解除に応じず、中部山地に跋扈した。これに対し米軍は2千5百の部隊を投入して、山地に封じ込めた(陸軍省調査班編 1931:12)。ラテンアメリカ全体から「我等のサンディノ」と敬愛され、絶大な人気をもつ。貪欲な米国の帝国主義に反抗して起ったのがサンディノ將軍である。土匪ではなく略奪、暴行をやらない(萬里野平太「羅典亞米利加大統領物語」佐藤編 1932:495-497)。1929年モンカダ將軍が大統領になったが、米軍の内政干渉に対し反米熱が高まる。モンカダの部下のサンディノが米国駐屯軍に抵抗し、1933年米軍は撤兵した(ラテンアメリカ中央會編 1944:638-639)。

⑨ 野口英世

先年エクアドル政府に招聘され、黄熱病の予防液を発見、グアヤキル市に野口町の称を付して記念された(朝日 1921:36)。ロックフェラー研究所員の野口英世博士を首脳とする研究団がエクアドルに派遣された。大統領自らグアヤキル港まで出迎えるという歓迎ぶりである(山岡 1922:264-68, 281)。今日でこそ野口英世が黄熱病を撲滅したが、征服当時この風土病を避けるため高地

のキトを首都に定めた（朝日 1922:75）。「エクアドルは我が野口英世博士が黄熱病原を発見し、萬世不朽の業績を残した地である」（守屋 1938:46）。

むすびに代えて

以上、江戸・明治・大正期におけるラテンアメリカ文献についての見取図を示した。明治期以降、歴史的視点からラテンアメリカを理解しようとする傾向は昭和期にも引き継がれており、その最大の成果が田中耕太郎『ラテン・アメリカ史概説』（1949年）である。この著作は戦後の出版であるが、執筆は戦時中のものである。その領域はラス・カサス、トゥパク・アマル、マルティ、サパタ、アヤ・デ・ラ・トレなどを取り上げて植民地史、社会思想史、社会運動史、法制史、対米関係史に及び、通史を超えた戦前のラテンアメリカ史研究の集大成であり、また戦前と戦後のラテンアメリカ研究を繋ぐ重要な役割を果たしている。なお戦前の移民文献の復刻版として石川友紀（監修）『日系移民資料集 南米編（全30巻・別巻1）』（日本図書センター、1998、1999年）¹⁰が刊行されており、貴重な資料を提供している。

注

- 1) 国会図書館、京都外国語大学附属図書館、神戸大学経済経営研究所中南米文庫、経済経営研究所図書館の他、同大学社会科学系図書館、国際文化図書館、人間科学図書館を利用させていただきました。経済経営研究所所長濱口伸明先生には利用の便宜と貴重な示唆をいただきました。記して感謝申し上げます。
- 2) 本稿ではラテンアメリカ研究という用語を使用しているが、学術的な研究として評価される著書ということになると限定的にならざるを得ない。本稿でのラテンアメリカ研究という場合、ラテンアメリカに言及している文献の集合として理解していきたい。現在のレベルで考えても一般書として十分評価しうる文献は枚挙にいとまがない。
- 3) 経済力の順にアルゼンチン、ブラジル、チリを指すかなり頻繁に使用されている用語。例えば「現在南米の十共和国中最も發達せるは、前記の亜爾然丁、伯刺西、智利、西洋人の所謂ABC三國なり」（伊達 1915:12）。小学校の副読本でも「南アメリカのABC…のAだけありまして、アルゼンチンは、本大陸中一番産業の發達した國であります」という記述がある（小學生全集編輯部編 1929:200）。
- 4) ラテンアメリカ全般（松尾 1914; 鈴木編 1934; 織田 1940; 平野、八百 1942; ラテンアメリカ中央會編 1944）、ブラジル（居初 1915; 藤田 1924; 伯刺西爾新報編輯部編 1933）、チリ（岩崎 1924）、メキシコ（井原 1914; 吉山 1930）、キューバ（大倉 1943）。
- 5) （海本 1943）は日本外政協會の出版であるが、著者はラテンアメリカ中央會常務理事である。他に（吉山 1930）でも1ヵ所「ラテンアメリカ」表記が使われている。なお、ラテンアメリカ中央會はラテンアメリカに関係する研究者、民間人および外務省、拓務省を初め関係団体の統合・連絡機関として1941年6月12日に発足した。単行本として『ラテンアメリカ叢書』、月刊誌として『ラテンアメリカ研究』（1941-44年に39号まで）を発行している。
- 6) 例えば国名としてもっともヴァリエーションの多いベネズエラの表記では発行年順に、部根重良、委内瑞拉、ゴネスエラ、ヴェ子ジュラ、ヴェ子ズエーラ、ヴェネズウイラ、ヴェネズエラ

(ロドリゲス・ヒメネス編 1935、編者は駐日ベネズエラ総領事)、ベネツエーラ、ベネズエラ (朝日 1922; 大島 1928; 小學生全集編輯部編 1929)、ヴェネジュラ、ヴェネズエラ、ベネズエラ、ヴェネゼラ、ヴェネスエラ、ベネスキラ、ゴネズエラ、ヴェネツエラ。なかではヴェネズエラがもっとも多用されている。

コロンブスでは、「コロンブス」表記が一般的だが、閣龍 (前野 1777; 司馬 1805)、コロンヒス (徐州彦蔵『漂流記』1863年)、古論武子 (福澤 1868)、コロムバス、コロムプス、コロンボ (箕作、峰岸 1903)、コロン (箕作、峰岸 1903)、コロンブ、コランバス、コルムプス (大川 1942) といった表記がみられる。ポリバルでは、ポリワアル、ポリーヴァル、ポリバー、ポリバア、ポリバル、ポリール、ポリバル (小學生全集編輯部編 1929)、ポリール、ポリーヴァル、ポリヴァル、ポリヴァ、ポリバァール、ポリヴァーなどの表記が現れている。

- 7) 現地人を指す言葉として戦前では普通に使われていた。
- 8) 日本人で初めてメッカを巡礼したとされるユダヤ・イスラム学者。
- 9) アジア主義を唱える思想家で、1932年の五・一五事件に関与して5年の禁固刑を受けた。この間に執筆したのが『近世欧羅巴植民史』である。
- 10) この資料集に所収されている本稿で対象とした明治期・大正期の文献は、通し番号で示すと (14) (15) (27) (28) (29) (30) (35) である。その他 (福澤 1869) が『世界國尽 窮理図解 (福澤諭吉著作集第2巻)』 (中川眞弥編、慶應義塾大学出版会、2004年) として複製されている。また (西川 1997) について松尾龍之介『江戸の世界聞見録』 (蝸牛社、1995年) が漫画版『(増補) 華夷通商考』として再現している。

先行期のラテンアメリカ文献

I 江戸期

- (1) 西川如見『増補華夷通商考』岩波書店、1997年 [初版 1708年発行]。
- (2) 新井白石『采覧異言』鈴木慧淳 (出版人)、1881年 [1713年完成]。
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/761119/32> 2019年9月16日閲覧
- (3) 新井白石『西洋紀聞』 (1715年) 『新井白石 (日本思想体系 35)』松村明 (校注)、岩波書店、1975年。
- (4) 前野良沢『管蠡秘言』 (1777年) 『洋学上 (日本思想体系 64)』佐藤昌介 (校注)、岩波書店、1976年。
- (5) 司馬江漢『和蘭通舶』 (1805年) 『洋学上 (日本思想体系 64)』沼田次郎 (校注)、岩波書店、1976年。
- (6) 荒川秀俊編 気象研究所監修『異国漂流記集』吉川弘文館、1962年。

II 明治期

- (7) 福澤諭吉『世界國盡—巻四 北亜米利加洲、巻五 南亜米利加洲、大洋洲—』慶應義塾、1869年。
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/761282> 2019年10月30日閲覧
- (8) 根本正『南米伯刺西爾、中米ニ加拉瓦、瓦地馬拉、西印度ゴアデロブ探検報告』外務省通商局、1895年。
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/767395> 2019年8月20日閲覧
- (9) 秋山四郎『外國地誌』共益商社書店、1897年。
- (10) 野々村戒三『南北アメリカ史』早稲田大學出版部、1903年。

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/987983> 2019年9月10日閲覧

- (11) 箕作元八、峰岸米造『西洋史綱』六盟館、1903年。
- (12) 井原儀『世界近世史』誠之堂書店、1904年。
- (13) 松尾小三郎『南米航海日記』民友社、1906年。
- (14) 水野龍『南米渡航案内』京華社、1906年。
- (15) 横山源之助『南米渡航案内』成功雜誌社、1908年。
- (16) 松川二郎『南米と南洋』實業の日本社、1911年。

Ⅲ 大正期

- (17) 横山源之助『南米ブラジル案内』南半球社、1913年。

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/950675> 2019年7月30日閲覧

- (18) クレマンソー、ジョルヂ 前田長太訳『今日の南亜米利加』大日本文明協會、1913年。
- (19) 鈴木真静『南米へ』政教社、1914年。
- (20) 松尾音次郎『パナマ運河開通と南米及墨西哥の富源』北文館、1914年。
- (21) 井原儀『墨西哥事情全』博育堂、1914年。
- (22) 大日本文明協會編『墨西哥全』大日本文明協會、1914年。
- (23) 伊達源一郎編『巴奈馬』（現代叢書）、民友社、1914年。
- (24) 居初寛二郎『現代之伯刺西爾』東文堂、1915年。
- (25) 伊達源一郎編『南米』（現代叢書）、民友社、1915年。
- (26) 深尾幸太郎『植民地大鑑』東洋タイムス社、1916年。
- (27) 田中誠之助『日本人の新發展地南米ブラジル』海外發展社、1919年。
- (28) 朝日嵐一『總南米』（邦人發展資料）、大日本圖書、1921年。
- (29) 永田稠『南米一巡』日本力行会、1921年。
- (30) 山岡光太郎『南米と中米の日本人』飛龍閣、1922年。
- (31) 朝日嵐一『ラテン・アメリカ史論』大日本圖書、1922年。

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/971900> 2019年7月28日閲覧

- (32) 竹澤太一『南米の寶庫伯刺西爾』ジャバントイムス社、1924年。
- (33) 藤田敏郎『南米の殖民地』アルパ社、1924年。
- (34) 岩崎實太郎『南米へ—最近の智利事情—』内外印刷、1924年。
- (35) 富田謙一、景山知二『南米ヘルー 大統領レギエア 秘露と日本』日秘協會、1924年。
- (36) 永田稠『南米再巡』日本力行会、1925年。
- (37) 山崎芳藏『ブラジル』大岡山書店、1925年。
- (38) 田中誠之助『南米の理想郷』日本植民通信社、1926年。

Ⅳ 本稿で参照した戦前昭和期の文献（戦前昭和期の文献リスト全体は続編にて掲載）

- (1) 大島喜一『邦人の發展地ブラジル』東文堂、1928年。
- (2) 小學生全集編輯部編『世界一周旅行』興文社・文藝春秋社、1929年。
- (3) 吉山基徳『我等の發展地メキシコ』日本植民通信社、1930年。
- (4) 陸軍省調査班編『米国カリビアン政策と満蒙問題』陸軍省調査班、1931年。

<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1452664> 2019年11月30日閲覧

- (5) 佐藤義亮編『墨西哥・中米・南米篇』（世界現状大観11）、新潮社、1932年。
- (6) 柳澤健『中米及び墨西哥』平凡社、1933年。
- (7) 伯刺西爾時報社編輯部編『伯刺西爾年鑑』伯刺西爾時報社、1933年。

- (8) 鈴木連三編『新市場ラテン・アメリカ』（貿易経済叢書第50号）、大阪市役所産業部調査課、1934年。
- (9) ロドリゲス・ヒメネス、カルロス編『亜細亜・亜米利加』亜細亜・亜米利加誌局、1935年。
- (10) 守屋荒美雄『實業新選地理』（外国篇）、帝國書院、1938年。
- (11) 田中耕太郎『ラテン・アメリカ紀行』岩波書店、1940年。
- (12) 福中又次『インカ帝國と日本人』富山房、1940年。
- (13) 松井佳一『メキシコ風土誌』育生社、1940年。
- (14) 織田和勝『重要性を激増した中南米最近の經濟事情』八紘閣、1940年。
- (15) プレスコット、ウィリアム・H. 石田外茂一、真木昌夫訳『ペルーの征服 上下巻』改造社、1941、1943年。
- (16) 大川周明『近世欧羅巴植民史一』慶應書房、1942年。
- (17) ガンサー、ジョン 山崎博訳『中南米の内幕』大日本出版、1942年。
- (18) ポブレテ・トゥロンコンソ、モイセス 加藤利祐訳『ラテンアメリカ社會發達史』ラテンアメリカ中央會、1942年。
- (19) 平野常治、八百嘉忠『中南米研究』海洋文化社、1942年。
- (20) 野田良治『ラテン・アメリカの全貌』遠藤書店、1943年。
- (21) 大倉敏之『戦争と玫瑰の糖業』ラテンアメリカ中央會、1943年。
- (22) 織田和勝『米國の抗戦力とラテンアメリカの資源』ラテンアメリカ中央會、1943年。
- (23) 海本徹雄『新汎米主義と米州国際法』日本外政協會、1943年。
- (24) ラテンアメリカ中央會編『ラテンアメリカ總攬』日本外政協會、1944年。
- (25) 細木繁『パナマとカリブ海』（新世界叢書）、目黒書店、1944年。
- (26) 田中耕太郎『ラテン・アメリカ史概説 上下巻』岩波書店、1949年。

参考文献

ラテン・アメリカ協會

1965 『日本のラテン・アメリカ調査研究書概説』、ラテン・アメリカ協會。

井沢実

1978 『ラテン・アメリカの日本人』、国際問題研究所。

中川清

1995a 「田中耕太郎博士とラテン・アメリカ—戦前期の日本とラテン・アメリカ—」
『白鷗法學』第3号、161-196頁。

1995b 「日本・ラテンアメリカ交流史Ⅰ」『白鷗法學』第4号、115-236頁。

1996 「日本・ラテンアメリカ交流史Ⅱ」『白鷗法學』第5号、119-286頁。

BOLETÍN del

Instituto de Estudios Latinoamericanos
de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto

Instituto de Estudos Latino-Americanos
da Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto

2019

<ARTÍCULOS>

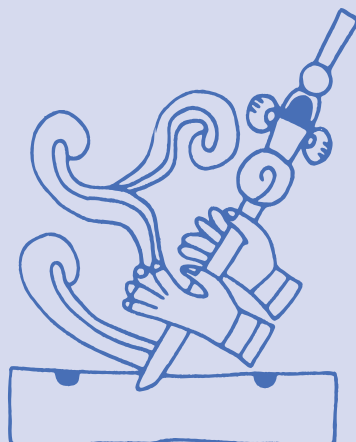
- Rival político de Pájaro Jaguar el Grande de Yaxchilán
..... Akira KANEKO 1
- Elecciones de las autoridades por usos y costumbres en los municipios
indígenas de México
..... Munehiro KOBAYASHI 25

<ESTUDIO PRELIMINAR>

- Estudios latinoamericanos en Japón antes de la Segunda Guerra Mundial (I)
..... Toyoharu TSUJI 49

<RESEÑAS DE LIBROS>

- ¿Qué es un chicano?: *poética de las fronteras*, por Toshiyoshi Imura
..... Takashi USHIJIMA 65
- Francisco Javier Alegre, *Historia de la Provincia de la Compañía de Jesús de Nueva España*, 4 vols., edición de Ernest J. Burrus y Felix Zubillaga, Roma, Institutum Historicum Societatis Jesu, 1956
..... Mieko SAKURAI 69



Vol.

19